

011-3
7

七
種
集
全



武江大標の印は不雅なる事世に稀あり
 御洲の伯玉の如くあまの望の如く名物を
 えしきんし三梅の心とぬき南の飛標を
 留まると廿年におくしりおとすもの
 能くしり母ふふをさめしむるは
 たに探ぬしつ物あはくまふるしり
 月のま言お曳年一の飛とそんたふる
 のこと念ひし物しそもの標しちのさ

あはれきこひもていふ事せしもの跡に小僧の
曲名をまをし一も取し之年一学にまよひ
日とふか一あふのまをるえくおほよ息
子らあしよぬおちをたれをひきし傳に
先の子は法と申さに入る馬をさめり
人より誇あんとん方寸唐卓をりて
うつあふのまをるあはれし一氏にす
まはれ

光聖國在唐寺石後上人を虚雲
大菩薩能化舟曠智大阿九我才子
あしそ草系北新居華屋と申す
人乃長男あり志の持よ上人の証
洒落乃そと教尔志事よつん
東西より百の契多流乃果やう
才の志と枉が安も愛へ周旋志系

了り二十余年終る志就來乾
忍辱も建立の御法院羅尼經
る巻地獄も世少幸此ま物
おちりせし先多婢も更身
は上人廻切勲ありて亦はさか
不朽なるらけや

儂台采洞主飛年謹至



みゆき書を主人一口階より三天を仰ぐ一刷の
はあやみ漸くくくく降氷の中よ白巾と
戴きの若葉の夜をまじひまを揖く僧
あつと主人問曰僧は何の僧を僧答曰番
まきの若葉我ハ天府忍辱の住持
しと書くくくその僧を合し一統魂と
煉々あよ天帝福をくまらうて乙膽と云
主人笑曰若依法を修すくくく我も
亦争向く夫ねくくくの花咲くは何僧
是日山嵐山と又洞窟の魂くはけくくく

雨とハ鬼折豆京を命とハ雪初杉葉ハ
 又六ヤルハ男子ヲ入リハ女子ヲ向方合ハ
 流るるありし主人憤恚とて再思一糸
 一と難曰頭顱よ多足を生し昔肩小
 眼鼻を穴牙とハ何何後宮とて笏を
 抛て曰夫ハ斯末世の俗習あり番能家と起
 ちり夫古の俗習ハ白茅茅あるん家よと此句
 一茅あるん後世必茅と粟ととちのちなり
 ちうれとて又ハ粟とてハ茅とてハ古矣

文政九年仲冬天多雪浪平桑五堂を執事録之

船虫お誌

船虫(沙船といふ大家子 任君を奈く東都
 難波津を更ふ) 家前系船のてり(雲
 庭之々) 下る時そ河田新浮乃益涌り(祀
 をぬかり) 阿波ハ長岑の書羅糸りも逢ひて
 毛唐人の哀をも(了) 了る生涯を送ると之
 と身世よふんそ茂子(何と) 乃此法を(何ん) や
 舟虫(船虫船虫一季の穂り生枝 初秋の
 下七秋の着根を食て育く之と世よ殊あり
 音を鳴て家家言族の徒然を奈くさ也 廻
 女う園つ 瞳をもちてく船虫(沙意の暝月の
 文了逢と 沙と雲一言事乃乃其けみも土ハ

長谷寺建立之俳諧

あつしや日おし八月を山の上
石膽

昨尚志くまのり人へ無うより
馬年

飛きかたも物心あうまの志のそと
柳村

あつしや終乃ちまの鳩うまのり
猿

七之月母あるひあつしや終あつしや
車

あつしやまのあつしや終あつしや
村

朝のあつしや終あつしや終あつしや
猿

あつしやあつしやあつしやあつしや
車

流す終あつしや終あつしや終あつしや
村

徒子佳一衣て遊るは口おしぶらりこい何うもや
船虫（海魚乃餌とありて涙交命を失ふそ
木舟は無咎きやき起送ハそた何を不怒ア
船虫（海魚乃餌とありて涙交命を失ふそ
妻和を歌くを伊り昇進の業ハ下りてきり
船虫（口何ハ舌何ハ舌あうて夢も何
ふん我海子一依許とつぬる一口ものをも
を（思る）のやをき種と伊口のぬたてをほ
うん子必世子多交天物といふ安ぬのとを
る子をおそ舞おそ歌

石橋寺石橋

石橋寺建立之俳諧

あつりや日あへ八月を山の上 石橋

廿尚志うまうし人いきうらり 馬年

飛きたけも物いあうらうまのうけて 柳村

あつりや日あへ八月を山の上 石橋

七三母あるいあうらうまのうけて 柳村

あつりや日あへ八月を山の上 石橋

朝の夜生駒へ道ぬ標をうらり 柳村

あつりや日あへ八月を山の上 石橋

流し流し佛子似きれ子をまへて 村

塙士の栴火ハ六年の毎

流

雨れく鼻月を移る四月迄

年

押くく嗚甲れを難くし

村

之いよひ琵琶も出りて勸むる

流

島中の風およま歌やつゆし

年

栴乃萬のおきれ夢の今ささる

村

月よおし何るまゝあるか也

流

三日つゝ買をさすまじりもしお撰

年

多村まつこのころに夜ふた

村

淡北海景

髪を玉や小糸あらしひも板のど

石膽

まのりおすす年一雀 鷄

龜丸

念流乃真帆も片帆もをりて

琴松

海松うる神も新集子さる

流

流ころ志をこし志をみけり芝草

丸

志をさるるくくくるの海松

松

たまの流は流るる居るえりし

膽

たまの流は流るる居るえりし

丸

ちりちりし給るるもた拙くあま

松

花をうらむを悔を二面出
物もあらずいともすはは年いふむ寺

三子山鏡の上をうらむ

世に絶く物ハ九月のころ

花をうらむを悔を二面出

ひもむきのおもひをうらむ

原山鏡の上をうらむ

花をうらむを悔を二面出

草花をうらむを悔を二面出

=

花 九 鏡 花 九 鏡 花 九 鏡

於木硯舎

小夜をうらむを悔を二面出

燈をうらむを悔を二面出

花をうらむを悔を二面出

人子とわらふをうらむ

花をうらむを悔を二面出

花をうらむを悔を二面出

三子山鏡の上をうらむ

花をうらむを悔を二面出

花をうらむを悔を二面出

鏡

たまのきも毎にうかき
 みの家もいかにいかに
 共らうくもやる降達うゆ
 秋の月男らういかに
 あり飛まされぬ歌の終
 孫か子に似ていぬ物う
 今宮力やのうたの衣も
 海苔もういかに降る
 三

七種集

武江名落寺輯

かしらういかにいかに
 花をいとぬらぬかけを春は月
 我たえの富もや脊戸の梅も
 ころしはきや物ふももあさ
 あらぬもは月もあは母おの孫
 水もやういかにいかに
 燈やの今もあはしやまは
 京 蒼虬
 十丈
 布雪
 千崖
 久り女
 仙子
 一路

夜ひとあけはききよおきけしむの鳥、空に
 思う代の鳥て終出は布とくきん ナホ 卧鵬
 くとひ寿のふやとてとてとらるふ 桐栖
 ひと通るもぬき風船すまじ イハ 奇袁
 芥はらや辛うしの人れらほる 井眉
 麦の床たつうとやいふ噂ひとる 公路
 え朝の橋人をきき須六の寺 スミヤ 西月
 せとらくし イナ 呉老
 海とてそりなるとぬやの峯 ヒヤウコ 墨巢

と記家やす記の梅の戸口うな ノラ 緩駕
 すぎ柳の大和をきかたき ヨリヤマ 梅日
 壁ふとく カチク 来報
 名月れす イツミ 利舟
 正月を キシウ 宗河
 人もうし ミヨハマ 陶齋
 ちの月 ハリマ 可章
 揺ふ ハリマ 王層
 伊勢 ハリマ 守三

日くつしあのみあやつさるし山津も 五草
 曉や古きあふし年した木とまに 泥中
 たる秋やさあまははく麻田 又外
 かこころ志事あは声ハあうらうらう 斗外
 夏川や流きぬめの川田の夢 雜洲
 蚤飛やあましも月のさかす 岱雨
 蠅亦さあめ意のかすく火山舎 寫光
 写まりりりや日れ出のむとあん 玄蛙
 茶のさきあふ茶又あやまのさる 文衣女

萩の風あまのつらおもたぬ 志の女
 大風ふやけぬや虫の物へあつと 魏道
 塹を渡る大やうぬくあつとま 頼
 まらの夜やあまのあふぬあつとま 蕪良
 小角力もさあまの癖ふまあつとま 武陵
 大造れ捕の輪あまや中まのいさ 野揚
 さらうのさあまのあつとまあつとま 美嶺
 待夜あつとあつとあつとあつとあつと 頼之
 鯉釣きあつとあつとあつとあつとあつと 村之

丁のさう江戸の流さく海へさき
千萩 イツモ
曙堂 ツマ

春の海蛭子のこまこま
三千雄 イキ

し鳥や蝶乃ち影つと
菊也 ヒセシ

鴛鴦のさきさきの木よせん
其映

左義長の河さめ代ひく
雀堂

世ぬまのぬいそらん花のうへ
岫丸 ヒコ

まらぬ坂や菜ふおと
只冬 サツマ

まき柳乃在
四軒 オウセン

三

うたいのめえ刀の柄や
土壺

中の一とて二月の夜あま
瓢風

ねくあて大さの葉のさ
了團 フレン

又ささりさえんか
葵亭 フニコ右入

さうまらるん
蘿文 オホト古人

あひとら常らふえ
羅風

温泉の産りす
三千雄 スハウ

蓬さふちの
季子長 アムシ

吹き柳あけ
吾栢

とらわすに海を渡るに 蜀魂 曉梅女
 薄屑ももゑのあまのこも 帷の起 鴻里
 ひくく日たふ髪えさうこく ぬ家か 乙谷
 花あしや止志あまのあは子まき 北映 サキ
 舟出さぬ 覚悟を 山やく 萩 茂推
 大や 焚え 食え 夕さくら 挂女 イヨ
 家あまの 来きハ 梅ちる 羊うれ 雲外 アツミ
 池尻やを 勝手の人の 梅 素律
 十月や 菖蒲を 池のぬき 栗三 四

雁帰れおやまのふのやめめ 甲所
 さつろそおは 役ひあまの 狛 宗齋
 遠涉や 折寄 記たえて 雪のみみ 桂堂 イセ
 涼も入て 砂みおと 持流を ちま 推己
 弄りて 堀川まも 夜も 翠川
 あまのこも 母は 暮の月 洪石
 五月の けりけり 馬の首 月底 スリ
 朝あま 蓮の 羊うれ 沙瀉
 つ合えうれ 莫お 水 而后

花の風ひくをくむる指と祭三カ卓池

拵クサ子に人おめくく三敷つとス秋拳

乞日や白らねくくふのまう三た三楚雀

旅すまに舟路をあらうまあ三り三香喬

近つたおまうに遠入や拵のむワカサ雲石

琵琶の音けくくや萬の裏之エチセ友甫

風の鳴きおまをくくはくあ拵カ白隣

赤くくくとこまカりカ其カ軍の月カ竹均

鴉つるを根けよれ物よカ三口めカ年緒カ

月あまひ森島のまをい本あうれ 年風

おまトりト小山トりト祭トすトたトハト 晚籟

推乃寧ハ人れれおま三な三を三く三く 遊味女

馬も三る三あ三り三や片手のあぬ三筒三 百示

柴の戸三赤三とあ三く三あ三り三三葉のむ 左了

一雁息を我ハまえサト一ぬる頭巾 可圭

温泉の山乃まエチコりエチコすエチコしエチコ如エチコらエチコのむ 年眉

海寒一一花をまお一れ一お一え一を一か一り 蓬拙

手を出せはのまシカあシカりシカまシカのシカ 確少山 八朗

卯の花や降日日来まハ秋雨のやむ 魚蒸

笑ぬとて猿人人さつと海向山 葛古

本は川やさちむち一葉のおとおと 叢

うけ控もおれ一流きや龍田川 一茶

つる侍ちハ花ハ月月ハ山路外上モ 芽丸

鶏の本本うう木ハ木好好四月四月ああ 可布

又又るるううららハハ花花のの直直ああららううややははらら 乙人

本本ややままののおおままままぬぬききハハ那那屋屋 拵白

山山風風ややぬぬききるるふふ又又ううらら芥芥のの舟舟 七五半

黄鶯のさけそらそらぬぬ四月四月ののおお 雨賀

曲曲ままににやや金金ハハおおははははたたのの杜杜花花 鷓周

ちちららののままれれとと出出ははらら花花のの外外ハハ春春 完明

吉原吉原ををはは戸戸をを籠籠ききてて冬冬のの月月 下モ 百揆

いいふふままののははたたぬぬちちととちちととちちとと 嵐齋

二二三三及及千千鳥鳥ののりりややめめ小小燈燈むむとと ちん岐

ゆゆららひひみみふふああるる朝朝逢逢てて冬冬ここままとと 煮月

美美のの魚魚ののちちああくくちちるる冬冬ののぬぬらら昔昔日日のの雨雨 晚葭

ままのの夜夜をを切切りりたたにに歳歳年年ををぬぬけけ たヒ 嵐外

千年のまほふふ糸子うさむ 草丸

正月やうさむのさくのぬれおのさ ^{サカミ} 雉啄

病とまもれうう後あんとくやまの月 吐丈

えぬ風や羽ふまを投れ後一糸 安成

退屈せよぬふく花お出に危 ^{ミモフサ} 雨塘

惟子や翁とをあ〜の事さゝ所 李攀

常の夜子裡をさあり〜其の月 挂丸

釣竿のふれおさ〜や風おあ田 潮月

きらら豆まけの事ままや後よ出る ^{カッサ} 音人

七

日中此遊ふ〜新法ふ〜あむ 呼牛

さるるののみら〜かされるま〜因分 弄亀

蚊のま〜や紅の夜風あ〜^{アハ} 平雄

此花野のい條おぬ〜百子を 越児

朝床同士出ぬあ〜笑ぬ法をふ ^{ヒタチ} 李尺

海をさ〜し帯出ぬ直ん若ふふ 化迪

ま〜を出し〜あ〜し〜やま〜^カ 由之

襟もさ〜あ〜た〜た〜し〜^カ 敬志

夕まの〜を〜人〜産大樹〜あ〜^カ 柔砂

あはれあはれとていふもよきことあり 確嶺 トナリ

あはれあはれの空手に留えし桜もつめ 伯父

草と山は暑くもさめあはれ幸夷咲 如水

嵐乃とらうらな日暮りこゝろ 楓 久城

くろの目をめしむもむつ葉のこゝろ 斗筵

目代うけや久もちりこゝろ 如去

山崎に花曇るまはる月の町 意橋

さるあはれい我衣れりあはれも 柔静

りね月やおとろひの影のそと 蕉雨

まき柳はやしぬあまふあしりあふ 護物

ね乃を後めりりこゝろひいあはれ 寥松

たれやうき月いきこゝろあはれ 心非

曉や花の音すむとりの山 啓山

まきのこゝろりりあはれすこゝろ川 稻波

うらひまや海をうらふ羽田村 燕市

花らもこゝろ心乃ちりあはれ日あはれ 幸雄

ふ甲のまらふこゝろあはれ伊の山 曉阿

えいまらふこゝろすこゝろあはれ里の梅 鶯堂

持まれの法もてこまきおひてふ
 孤山
 鶴鴛の尾先ににめぬれ余寒をうれ
 太師
 法々の道おら付たふハ氣をうら
 梅室
 笛もちハ震もころ囀や子の力
 国村
 菴の戸やたのふちをい花さり
 双湖
 空ふらうすもや六浦乃ほくとん
 己之女
 柳もくもくくる降も葉もさ
 有臺
 夕の午や祝る古えし方る難合せ
 應こ
 檀林のまるぬ床しすも枕咲
 一蕙
 九

夕はくも来んあふやうにわひし
 須布
 折のちに連翹はぬ垣めを覚
 繩阿
 ぬ柳も柳乃魂乃ぬるもさ
 梅溪
 まの目せもるももうさし鳴鳴
 文玉
 赤くハ橋ももくけくあめを
 三の南
 馬おちるんせしやうし柳もさ
 南井
 蔦多くあれた神おぬくあ拾のま
 一瓢
 蚊もあしとつふ言もあふ山外
 有縣
 うらうらたがふ声れし秋の雛子
 古翠

煙さの おま乃 芥も 月夜うめ
 家さみふ 月お影あし 浅 穡
 柳とーし 家ハまの 山
 何ありと 言て ぬきん さまの 雪
 名を ちうの さまれと ー 其いじ 子る
 亦も 水おき ー や 其又 お 遊 家
 炭 挽 山 山 ー 其いじ 子る
 一 百里 耳し 遊ふ 逢や 花さる
 かへ 鳥れ くら や 心 丸 端 ぶ 来く
 御 風

十

かな 目を 花おき も ー 其いじ 子る
 お 岩 け 傍乃 い ぬ 花 や 山 声
 人 ー 其いじ 子る ぬきん さまの 雪
 炉 ひ した ぬきん さまの 雪
 茶 の 花 や ー 其いじ 子る
 近 々 花 ー 其いじ 子る
 亦 季 子 ー 其いじ 子る
 くら 秋 や 茂 の 老 人 又 ー 其いじ 子る
 ぬきん さまの 雪

渭江

淋山

馬手

其道

龜州

麦園

錦水

楚曰

木園

状もきあらの夜寢とありま利
 可并取雲あつや何まのそ所
 柳のそ教てあつあつ小川あれ
 ありあをもちきほしみるの鳥か
 すし終り空をちいひうききさわ
 厚みや実をい揺ぬのそ枕
 きと鳥や雲のそくやうそ冬月
 松ひくまらとや石のあつぬもる
 物を出て足をはかあつあつ行

十一

柳村

琴松

竜二

亀泉

呂秋

左未

一幸

柳三

日人

宮城野や虫よあつあつとまのそ
 樹をた一夜のあつあつやむの山
 何そあや何きあつあつあつやみ
 何新あもれあつあつや秋のそ月
 山そあつあつあつあつあつあつ
 やる何やあつあつあつあつあつ
 うたあつあつあつあつあつあつ
 夏瘦やあつあつあつあつあつ
 義あつあつあつあつあつあつ

松豊

雨柳

太令

羊笛

一鳳

胡東

太原

買月

雄測

何れも一た我の事月れらん
 名月やあまのほのあも世一物
 三日やもとに帰きのあまをいと
 ひさしたるお子もあ持ちまを
 庵の安は十日やもせえの仙を
 ちのちやあまひるすた朝朝
 涙まゝし井筒の底のうまのま
 九日の三あやうとひまはあま
 ちあはれずれとあま一秋の月
 十一
 百非
 萱城
 子孝
 南出
 鷹秋
 蒼莖
 柳立
 一海
 松子

春れ月をいあゝる母すも
 うきこ一ちもほのあまは
 ちのちのあまあまあま
 宵ののあま月あまのあま
 ぬくしと木免あまやまの月
 嵐あまのあまあまあま
 四五里来一あまのあまあま
 秋らんやあまのあまあま
 十あまのあまあまあま
 月晴
 清女
 十弁
 東姿
 亀因
 文好
 双鶴
 南雪
 小義

おのゝとてはなれぬ月橋

水おとりのみ上きかしく鳥我海青

おの雪や白鳥のしらぬ鳥鳥松徑

おのいづれか一かたははなれぬ鳥鳥乙羽女

世のちひや花の親木れ崖もある鳥麦家

おのちひや花の親木れ崖もある鳥猪丘

おのちひや花の親木れ崖もある鳥蘭村

おのちひや花の親木れ崖もある鳥双文

おのちひや花の親木れ崖もある鳥士由

4三

髪をいふおとらるさくひ咲桔梗縫女

遠鳥や高草おとらるさくひ咲桔梗割字

雞頭や紺屋の塙おとらるさくひ咲桔梗雀夜

小車一をさくおとらるさくひ咲桔梗曲三

朝のちひや花の親木れ崖もある一甫

芋れ露おとらるさくひ咲桔梗眠山

迹猫や天の橋おとらるさくひ咲桔梗守丸

鳥おとらるさくひ咲桔梗つね女

鳥おとらるさくひ咲桔梗鳳菜

新らうやもろこし畑よりのまほ 互有
 雪こころを記小月夜の秩父山 平波
 来し秋のまかみ結す。昼のま 玉丈
 月をこころの欲きふ二の山 一壺
 花笑して秋こころのまのま 互谷
 木のまのまのまのまのまのま 百拳
 人住の井筒まのまのまのま 塘水
 杉風を牽くまのまのまのま 栲栢
 今もまのまのまのまのま 苔園

十四

水切らまのまのまのまのまのま 青菴
 まのまのまのまのまのまのま 東岡
 のまのまのまのまのまのまのま 竹丈
 三日月の影まのまのまのまのま 道豊
 一夜のまのまのまのまのまのま 拍奴
 新まのまのまのまのまのまのま 豊女
 物のまのまのまのまのまのまのま 千女
 まのまのまのまのまのまのまのま 一草
 西海子のまのまのまのまのまのま 祇三

夜はくさくさお園れしほりん 廿好
人影の暮るてけいひと柳か 路標
山もん流し日暮るれ桜のそと 祖鳩

閑室

鶯の巢のうらみぬめし庵の業 斗興
ちよも木の葉ふかに世思のゆるし 畧水
世の世流をたれとしひらく字を 槿露
精をまひと足ひまはまらうまぬ ^{カネチ} 毛旅
月うけとるしはるめつとふ本槿 寿山

十五

石の島寺和尚傳

芭蕉祖師の遺教をうらむるは葉一盞
の下に力をやれし十年のや水路ふたは
寺こふたうとれぬの任持ふあつとあふ
人まぬ風鈴の一物をたあををま
在宗元丈の町を殊あ成まらうつる依
まらう三おろ望見かろ合るあたの

本寺あつとせり

岸におと碑を寺 北溟

オラニヤコ

秋雨の穂積をくわや又一夜 ナラフコシチ 卓堂

もうこの花よめや弄しくもか子 洵水

花をえりてら代裏をさる書外 長芦

ほく時川風の来ぬちもたが 芥彦

お美葉我を餌うてあつ枝の 可月

蛤の鳴はゆつ葉を百千の 葛路

糸ハたききもねふくむ小風 曉山

胸のすく新まゝく雑子ノ書

鶯のくわいもふ二月の 玉鉉

十六

花中美人字履流し川社 老之女

野山ふりくたぬ雲雀は 千里

あゝあゝ年や年まをくも 長子

おぬきまの月又は蟹 ヤフタ 礪堂

柳はきく秋のけりて田のわ家 棋城

あやまや隣へ這入りやも 葵宗

とかくく屍きふてお柳 アキ 芳林

傘さして柵めうんやまめ アキ 甚人

猿畑に侍もれあしんは都 聖人

世を捨一人はししの中を以 椿堂
 の徒ぬるまのめしし 梅の也 鶴水
 のまじしの際迄まのめや汐于人 霞
 竹尹少くやあはさるるや竹の也 モララカ 聿修
 雨乃あや泥 是れしきしんん 寛長
 さるる我や古記名のなる村の松 子龍
 涼しきとてふる間み川やまの月 孝公
 ひまの家の風品ふをのり聲 南宮
 石隆へて六月寒しし 瀬川 淇水

十七

秋平洲へおきしゆまきく 去るも 谷雄
 美介や葉あふ 秋もまのえをん 亀之
 阿比風の急いぬし 来ぬし 枝就
 朝露やぬは上りてく 三木の女 白鳩
 あさ雪乃やふし 藤も白く 千秋
 きのぬま母やまのし 並木のる 吐月 イセリヤ
 春日山や二月のぬ間 秋のら 杉栗 ニラケス
 麦の穂のさるふはとまのまのい 松雨
 冬は母を許す 又科の月を守 錦之 ユラ

石庭寺上人夷、千島小流よそ

一々そのゆかり

夏一歌し出さし時もなる懐き ハコラテ 布席

来れもよむ其花の力をきけり スカリ 竹据

去る雪の人のうらみきく スカリ 雨考

芳ききこころきり ニホシ 長寺 夏代女

あふさる一の字引く秋の世 ニホシ 子人

俊親のこゝ入替 ニホシ 紫明

鯉すけで片手は ニホシ 能佛

十八

新のあゆみ お 湖秋

たそがきや 久 俊野

おし 久 士峰

才 久 治橋

埋 久 丘住

又 久 小叢

友 久 蘭叟

折 久 沼人

紙 久 松風

離市やは西乃坊の娘よき
 日、
 思ふ入るるよめや柱み残るる
 龜丸
 かきとらむれ宿の津乃を
 思ふぬ
 明まきほ名月うるさきふれぬ
 一、
 志とくしき年うめくもや枇杷の
 一、
 鶯の手ふり袖を仰為山
 石膽
 の梅晴のおと空くりこん
 一、
 杉しりやまき若の虫をたむ
 一、
 冬にお母も不破のお嵐戸あふ
 一、

十九

追加

うはさきの神乃化れう飛 蟻 サニタイ 扇風
 妻らしし友人の出て来る野末は 其叶
 夕夕千夜のゆて嬉しや枯尾を 雪曉
 痛幅そるあり朝はふ人あり 牙身
 梅柳古人乃 吟 阿たりし 一 醒
 きても裏に 螢のつく夜来 吞海
 朝陽に若ふおそふけき難煮る 五角
 新化やお撲りおのこ子己の書は 江三

おしり人の子愛りおのち
餘力

あき葉み葉夜明け月の空み持
志望

寝起て明星深し星乃中
志望

果なき夢の空(果なき夢の空)
夢息

山さくるとおしり七日の都の空
梅雪

舟待や舟の動くをえて深し
正徳

夕にやおしり終も久しぬ若葉が
宮翠

夕のそよ風や初々も梅の夜明け
真彦

夕の徳やあふる家み素梅のち
藤太

おしり人の子愛りおのち
御承馬と引

出陣の年おしり人の空の空
とちあ

家平の空おしり人の空の空
とちあ

枯枝の空おしり人の空の空
とちあ

夕のそよ風の空おしり人の空の空
とちあ

空を七種集めやあふる空の空
とちあ

空を七種集めやあふる空の空
とちあ

空を七種集めやあふる空の空
とちあ

と晴上人より子の志願一冊を
胡公の錦の浪波うらなふを
めりし一室尚尊堂平ちか
を信衆の捨平さんて
傍る奥の老法師北海集と
り改兩枚と

和學圖書印
3. 14

